

多和田葉子の文学における境界

お茶の水女子大学 谷口 幸代

多和田葉子は、ドイツを拠点に、日本語とドイツ語で、小説、詩、戯曲、ラジオ劇、エッセイ、評論とジャンルを横断しながら精力的に創作活動を行っている。日本とドイツでそれぞれ二十冊以上の著書を上梓し、日本では芥川賞や読売文学賞等、海外ではシャミッソー賞やゲーテ・メダル等を受け、国際的にも高く評価されている。田原氏のいう、〈本当のバイリンガル〉作家である。

ことばとジャンルを越えて生み出される多和田の文学では、〈境界〉が描かれることが多い。異なる文化圏・言語圏に迷い込む旅人の姿は、境界線上で既存の価値体系に疑問を投げかけ、新たな文化を創出する可能性を秘めた存在として描かれてきた。

いっぽう、2011年3月11日以後、文学という表現形式の力が改めて問い直される中で、多和田の文学でも震災、特に福島第一原子力発電所事故の問題が繰り返し取り上げられている。

多和田作品で一貫して重要なモチーフとされてきた〈境界〉は、近年のこうした問題系の作品ではどのような表象としてとらえることができるだろうか。本発表では、ことばの境界と国境を越えて、今年の春に日本で、そして6月にはドイツで上演されたばかりの戯曲「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」を中心に取り上げ、この点について若干の考察を試みたい。